long sample

山茶花　久

「ロイド、ロイドったら！　全くいつもいつも、どこほっつき歩いてるのっ！」

エルミーラ・ヴェスト・エミンズは肩を怒らせ、叫んだ。

高級絹をふんだんに使ったワンピースタイプの寝巻き姿で、暗い赤色の絨毯を踏みしめ歩く。

ウェーブがかった金髪は、横になって邪魔にならないようにとゴムで一つにまとめられていた。

言わばお嬢様の寝間着姿。

これからお香を焚いてベッドに滑り込むための服装。

だが、エルミーラはまだ横になるわけにはいかなかった。

故に、こうしてのっしのっしと自分の城を闊歩しているわけだ。

無限に続きそうな長い廊下を進みながら、一つ一つ、扉をあけては探し物の名前を呼ぶ。

窓の外は暗く、空の星は分厚い雲に飲まれて見上げることはできなかった。

もう何度呼んだのかもわからないほど「ロイド」と叫んだ頃、数個先の扉が静かに開かれる。

扉の奥から姿を現したのは、執事服で身を固めた細長い風貌の男。

「そんなに大きな声で呼ばずとも聞こえていますよ、お嬢様。何度も何度も、はしたない」

男はエルミーラを見下ろして言った。

首を曲げると、溢れた前髪の隙間から、渦巻く一対のツノが現れる。

エルミーラを見つめる黒い瞳は横長に歪んで見えた。

男の顔で認識できたのはそこまでだ。

目元から顎にかけてを大きく白いハンカチが覆い隠しており、その内側を覗き見ることはできなかった。

羊のツノと瞳を持ったハンカチ男、彼こそがエルミーラの探し物にして彼女唯一の執事、ロイドだ。

彼がヒトと獣、どちらに近い存在なのかは雇用主のエルミーラにもよく分かっていない。

そればかりかこのロイドと言う執事について、エルミーラがしっかりと理解している部分はそう多くはないのだ。

エルミーラが知っているロイドのこと。

彼は執事としては余りにも出来すぎていること。

一人でエルミーラの身の回りの世話をやりきってしまうくらいには万能であること。
万能すぎて、エルミーラが本来すべき仕事まで肩代わりしそうになっていること。
そして、

「このロイドが仕えて差し上げているのですから、エルミーラ様にももっと私のように優雅な素養を身につけていただかないといけません。お嬢様は外見は良いのですがどうにも幼稚でいけませんからね」

主従関係をひっくり返さんばかりに、とんでもなく口が悪いこと。

「……聞こえていたんだったら、次は返事でその次は参上、執事の役目でしょ！」

エルミーラは苛立たしげにそう言った。
「お嬢様」と「執事」。歴然たる立場の差があるにも関わらず、取り乱すのはエルミーラ、落ち着き払っているのはロイドだった。

「何をおっしゃいますかお嬢様」

ロイドはその静かで挑発的な態度のまま、ワザとらしく頭を降った。

「先ほど私は「かしこまりました」と返事をしましたし、今こうして参上しているではないですか。私はお嬢様の執事である以上、お嬢様が指定された役目を完璧に果たしていると言えます。そんな仕事熱心な私を、お嬢様は信用してくださらないのですか？　ああ、嘆かわしい」
「……だったらっ！　次はもっと聞こえるように返事！　それと返事したら10秒以内に参上、いいわね⁉」

エルミーラは暫し言葉に詰まり、苦しげにそう返した。
これ以上「言った」「言わない」の水掛け論をしても意味がない。
常に油が差してある彼の舌滑りの前では、５分と持たずに言い負かされてしまうに違いない。

「おお、10秒もの猶予を頂けるのですね。さすがはお嬢様、寛大でございます。それだけあればこのロイド、参上の度に庭先のバラで花束を作ることができましょう」

そらまたきた。
エルミーラはほんのり感じる頭痛に眉根を寄せた。
これ以上コイツの無駄話を聞いていようものなら、寝つきが悪くなって仕方がない。

「してお嬢様、今晩はこのロイドめに一体どんな後用事でございましょうか？」
「っ！　そ、そうだった！　あんたを探すのですっかり忘れてた！」

エルミーラは手に持っていた小瓶をロイドの目の前に突きつけた。
小瓶の中には蜂蜜色の液体が僅かに残っている。
エルミーラが小瓶を振り上げた瞬間、辺りに花の香りが広がった。

「おお、私との会話のため、そのような大事を忘れてくださるとは・・・・恐悦至極にございます」
とかなんとかロイドが言っているが、そんなものは無視。
エルミーラはもう一度小瓶を揺らした。

粘性のある蜜液は、瓶の揺れに合わせてゆっくりと瓶底をなぞった。

「毎晩使うって言っておいた香油、補充を忘れるだなんてとんだ執事じゃなくって？　呼ぶ度にバラを持ってきてくれるのもいいけど、毎晩の香油の方がわたしには大切なんだけど？」

決まった！　とエルミーラはほくそ笑む。
この口が達者なロイドがミスをするなど珍しいこと。
普段からどっちが主人なのかわからない程にエルミーラをおちょくってくる傲慢執事に天誅を下す絶好のチャンスだ。

そんなネタを公開するまでの間に、既に3回はおちょくられた訳なのだが、それもこの鬱憤ばらしができるとなれば甘んじて受け入れよう。
さて、どんな言い訳を繰り出してくるのか。
そんな風に考えていたエルミーラの目前で、ロイドは首を傾げた。
エルミーラの手から小瓶を受け取り、中の蜜液を覗き込む。

「おかしいですねぇ。お嬢様の手首と首元の面積を考えると、あと数日は補充せずとも良いと考えていたのですが……お嬢様、少し使いすぎでは？」

ざくり、と心臓を抉るような言葉。

驚いた心臓がそのまま口から飛び出そうになる。

「……そ、そんなことないわッ！　とにかく足りないものは足りないの！　とっとと補充なさい！」

聞きたかった言い訳すらも無理矢理中断し、エルミーラはロイドに小瓶を押し付けた。

「ロイド、ロイドったら！　全くいつもいつも、どこほっつき歩いてるのっ！」

エルミーラ・ヴェスト・エミンズは肩を怒らせ、叫んだ。

高級絹をふんだんに使ったワンピースタイプの寝巻き姿で、暗い赤色の絨毯を踏みしめ歩く。

ウェーブがかった金髪は、横になって邪魔にならないようにとゴムで一つにまとめられていた。

言わばお嬢様の寝間着姿。

これからお香を焚いてベッドに滑り込むための服装。

だが、エルミーラはまだ横になるわけにはいかなかった。

故に、こうしてのっしのっしと自分の城を闊歩しているわけだ。

無限に続きそうな長い廊下を進みながら、一つ一つ、扉をあけては探し物の名前を呼ぶ。

窓の外は暗く、空の星は分厚い雲に飲まれて見上げることはできなかった。

もう何度呼んだのかもわからないほど「ロイド」と叫んだ頃、数個先の扉が静かに開かれる。

扉の奥から姿を現したのは、執事服で身を固めた細長い風貌の男。

「そんなに大きな声で呼ばずとも聞こえていますよ、お嬢様。何度も何度も、はしたない」

男はエルミーラを見下ろして言った。

首を曲げると、溢れた前髪の隙間から、渦巻く一対のツノが現れる。

エルミーラを見つめる黒い瞳は横長に歪んで見えた。
男の顔で認識できたのはそこまでだ。
目元から顎にかけてを大きく白いハンカチが覆い隠しており、その内側を覗き見ることはできなかった。

羊のツノと瞳を持ったハンカチ男、彼こそがエルミーラの探し物にして彼女唯一の執事、ロイドだ。
彼がヒトと獣、どちらに近い存在なのかは雇用主のエルミーラにもよく分かっていない。
そればかりかこのロイドと言う執事について、エルミーラがしっかりと理解している部分はそう多くはないのだ。

エルミーラが知っているロイドのこと。
彼は執事としては余りにも出来すぎていること。
一人でエルミーラの身の回りの世話をやりきってしまうくらいには万能であること。
万能すぎて、エルミーラが本来すべき仕事まで肩代わりしそうになっていること。
そして、
「このロイドが仕えて差し上げているのですから、エルミーラ様にももっと私のように優雅な素養を身につけていただかないといけません。お嬢様は外見は良いのですがどうにも幼稚でいけませんからね」
主従関係をひっくり返さんばかりに、とんでもなく口が悪いこと。
「……聞こえていたんだったら、次は返事でその次は参上、執事の役目でしょ！」

エルミーラは苛立たしげにそう言った。
「お嬢様」と「執事」。歴然たる立場の差があるにも関わらず、取り乱すのはエルミーラ、落ち着き払っているのはロイドだった。
「何をおっしゃいますかお嬢様」
ロイドはその静かで挑発的な態度のまま、ワザとらしく頭を降った。
「先ほど私は「かしこまりました」と返事をしましたし、今こうして参上しているではないですか。私はお嬢様の執事である以上、お嬢様が指定された役目を完璧に果たして

いると言えます。そんな仕事熱心な私を、お嬢様は信用してくださらないのですか？　ああ、嘆かわしい」
「・・・・・だったらっ！　次はもっと聞こえるように返事！　それと返事したら10秒以内に参上、いいわね⁉」

エルミーラは暫し言葉に詰まり、苦しげにそう返した。
これ以上「言った」「言わない」の水掛け論をしても意味がない。
常に油が差してある彼の舌滑りの前では、5分と持たずに言い負かされてしまうに違いない。

「おお、10秒もの猶予を頂けるのですね。さすがはお嬢様、寛大でございます。それだけあればこのロイド、参上の度に庭先のバラで花束を作ることができましょう」

そらまたきた。
エルミーラはほんのり感じる頭痛に眉根を寄せた。
これ以上コイツの無駄話を聞いていようものなら、寝つきが悪くなって仕方がない。

「してお嬢様、今晩はこのロイドめに一体どんな後用事でございましょうか？」

「っ！　そ、そうだった！　あんたを探すのですっかり忘れてた！」

エルミーラは手に持っていた小瓶をロイドの目の前に突きつけた。
小瓶の中には蜂蜜色の液体が僅かに残っている。
エルミーラが小瓶を振り上げた瞬間、辺りに花の香りが広がった。

「おお、私との会話のため、そのような大事を忘れてくださるとは・・・・恐悦至極にございます」

とかなんとかロイドが言っているが、そんなものは無視。
エルミーラはもう一度小瓶を揺らした。
粘性のある蜜液は、瓶の揺れに合わせてゆっくりと瓶底をなぞった。

「毎晩使うって言っておいた香油、補充を忘れるだなんてとんだ執事じゃなくって？　呼ぶ度にバラを持ってきてくれるのもいいけど、毎晩の香油の方がわたしには大切なんだけど？」

決まった！　とエルミーラはほくそ笑む。
この口が達者なロイドがミスをするなど珍しいこと。
普段からどっちが主人なのかわからない程にエルミーラをおちょくってくる傲慢執事に天誅を下す絶好のチャンスだ。

そんなネタを公開するまでの間に、既に3回はおちょくられた訳なのだが、それもこの鬱憤ばらしができるとなれば甘んじて受け入れよう。
さて、どんな言い訳を繰り出してくるのか。
そんな風に考えていたエルミーラの目前で、ロイドは首を傾げた。
エルミーラの手から小瓶を受け取り、中の蜜液を覗き込む。
「おかしいですねぇ。お嬢様の手首と首元の面積を考えると、あと数日は補充せずとも良いと考えていたのですが……お嬢様、少し使いすぎでは？」
ざくり、と心臓を抉るような言葉。
驚いた心臓がそのまま口から飛び出そうになる。
「……そ、そんなことないわッ！　とにかく足りないものは足りないの！　とっとと補充なさい！」
聞きたかった言い訳すらも無理矢理中断し、エルミーラはロイドに小瓶を押し付けた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「全く！　全くまったくまったくぅっ！　ロイドのヤツ変なとこで鋭いんだからっ！　め、面積なんかで量を調節していただなんて……」
香油がたっぷりなみなみ入った小瓶を抱え、エルミーラは自分の部屋へと飛び込んだ。
アンティークな家具で統一された室内は、温暖な橙赤色の光に満ちており、入眠には最適な湿度に調節してあった。
部屋に鍵を掛けた後、几帳面に施錠確認を行うエルミーラ。
それが終わると、部屋の隅に鎮座するベッドへと歩み寄る。

ベッドのクッションに腰を沈め、大きくため息をついた。

エルミーラが三人寝たって隙間ができそうな巨大なベッドの片隅で、エルミーラは改めて小瓶を見つめる。

淡いランプの炎に照らされて、蜂蜜色の香油は怪しい輝きを放っていた。

「……もぉっ！　違う言い訳、考えなきゃ」

エルミーラはぶぅ、と頬を膨らませて小瓶をポケットへとしまい込んだ。

そしてベッドから立ち上がる。

向かうのは柔らかなクッションの上ではなく、木で作られたベッドの足の下。

僅かなその隙間を覗き込むと、エルミーラは絨毯の端を掴んで持ち上げた。

絨毯の下からは木の床、そして取っ手の付いた隠し扉が顔を出す。

「今日もバレては居なさそうね……よしよし」

エルミーラはポケット越しに小瓶の感触を確かめると、隠し扉をこじ開けた。

そこに現れるのは下へと続く木の梯子。

少女は静かに梯子に足を掛け、するすると地下空間へ消えていく。

迷いも戸惑いもない。

その世界はエルミーラのよく知った世界。

誰にも知られてはいけない秘密の花園だ。

ランプに火を灯すと、地下空間がオレンジ色に照らされた。

そこはまるで地下牢のような作りになっていた。

そこそこの広さはあるものの、壁際にはありとあらゆる悍ましい見た目のオブジェが並べられ、石張りの壁には鞭や荒縄、ロウソクなど、見ているだけで不安になりそうなアイテムの数々が丁寧に並べてかけてあった。

「……んッ、ふぅ☒」

エルミーラはその湿り気のある空気を吸い込むと、頬を赤らめて吐き出した。

髪留めを解き、手入れされた金髪を解放する。

ここはロイドにすら教えていないエルミーラだけの秘密の部屋。
彼女の欲望を満たすためのあらゆる物品を収集しているコレクションルーム。
あけすけに言えば、少女の秘密の、オナニールームだ。
「まったく、いつ見ても驚愕するほどのコレクションよね、この、変態っ」
エルミーラはそう、一人罵声を投げかけた。
発した言葉は部屋中に反響し、エルミーラ自身の皮膚に突き刺さる。
「……ッ☒」
ぶるぶると肩を震わせ、エルミーラは肌を震わせる振動を受け止める。
暫しそのまま歓喜の呼吸を続けた少女は、徐に寝巻きのワンピースに手をかけた。
胸元のリボンを解き、肩紐を外し、布生地を引きおろす。
細く長い手足や、貝のように小さな手のひらには収まりきらない、柔らかな乳房が露わになる。
本来ならばシルクよりも白いはずの素肌も、揺れる炎に照らされて、濃いミルク色に染め上げられていた。
はだけた胸元を見下ろすと、ツンと上を向いていた自らの乳首と目があった。
既に地下の空気に触発されてムクムクと大きくなり、はしたない感情をいっぱいに詰め込んでいた。
エルミーラは洋服を脱ぎ切って、その細い足をさらけ出す。
勢いに任せ、白のショーツも剥ぎ取り、ワンピースの横に投げ捨てた。
綺麗に切りそろえられたアンダーヘアは、自らが生み出したとろみのある汁で艶のある濡れを保っていた。
しっとりとした輝きが、炎の揺らめきで浮き立つように見える。
暗い石畳の世界で一人、エルミーラは産まれたままの姿に還る。
背筋を伸ばし、乳首がきゅうと締まる感覚を堪能した。
ウェーブがかった髪の毛先が皮膚をくすぐり、もどかしくも心地よいタッチで刺激してくる。

「使い切る言い訳、何にしようかな」

エルミーラは誰にともなく呟き、小瓶の口を開けた。

胸元で小瓶を傾けると、甘い香りを放つ香油がエルミーラの白い肌に落ちていく。

とろりとスローモーションで液滴が降りていくと、肋骨の膨らみに溢れ広がった。

「んっ⊠」

冷たい感触に、思わず声を漏らす。

蜂蜜色が肌に広がり、いやらしい滑りが全身を覆い尽くしていく。

溢れ行く香油を掬い上げると、エルミーラは全身にそれを塗り広げていく。

シルクのような柔肌は、あっと言う間に下品なテカりを放つ性的な肉体に変わり果てた。

乳房を揉みしだくように香油を塗り、ツンと痺れる乳首にも丹念にすりこんでいく。

はしたなく勃起した乳突起に触れ、エルミーラは目を細めて鳴いた。

ヘソの奥まで蜜を沈め、「ちゅぽっ」とわざと音を立てて引き抜く。

尻肉と太ももに指を這わせ、その質感を強調するように指を沈ませる。

アンダーヘアにも蜜を振りかけ、自らの汁と混ぜ合わせた。

仕上げに顔、そして髪の毛までも艶々の香油に浸してしまった。

金の髪がまるで彫刻のような反射を持ち始める。

体温を吸い上げ、心地好い温度になった香油の膜が、エルミーラの裸体を柔く包み込んだ。

「こんなに、使っているんだもの。無くなって当然なのよっ……」

身体の隅々まで甘い香りで満たしたエルミーラは、そんな自らの姿を思い浮かべ、甘い絶頂に達してしまう。

この姿を鏡に映し、眺めるだけで無限にアクメを迎えられそうだった。

だが、エルミーラの「遊び」はこれだけでは終わらない。

こんなものはあくまでただの下準備。

「ああ、忘れていたわ。これが無いと大変ね」

本番に向け、エルミーラはまだ微かに温いワンピースを拾い上げた。

ポケットを弄り、小さな鍵の付いた腕輪を取り出す。

エルミーラはそれを大事そうに撫で、腕にはめた。

幼子のような輝く瞳で、エルミーラはオブジェの一つに歩み寄る。

先日取り寄せたばかりの新品だ。

それはシルエットを例えるとすれば「椅子に座った大柄な人形」ような見た目をしていた。

エルミーラより大分大柄な人形が、無骨な基盤が丸見えになった台座に腰を下ろしている。

買ったその日からエルミーラの心を鷲掴みにした最高の一品。

あらゆるニーズに答えると謳われた、魔力可動式のオナニーマシンだ。

裸体の少女は期待に胸を膨らませ、人形についたジッパーを引きおろす。

ジッパーに触れたその瞬間、腕に下げた小さな鍵が金に輝いた。

腕輪と鍵はマシンの起動装置だ。

起動や停止はもちろん、幅広いオプション設定を行うためのコントローラーである。

ロイドや香油に気を取られ、先程はついうっかり忘れる所だった。

これが無ければ起動も停止もできない。

これが無ければ、至高のオナニーマシンもただ悪趣味なオブジェなのだ。

ジッパーを下げきり、縦に割れた口を左右に広げる。

人形の内部がエルミーラの視界に現れた。

人がちょうど一人分入り込めそうな空間。

サイズは正に、エルミーラにぴったりだ。

空間の壁面にはこれでもかと穴があり、大小様々なアイテムが顔を覗かせ、活躍の機会に備えて待機していた。

「もう、ロイドのせいで待ちきれなくなっちゃった……っ☒」

ドクン、ドクン。
心臓が楽しそうに踊り狂い、今にも口から飛び出しそうだ。
これからの「事」を想像し、手足が勝手に震えだす。
「ここに座ってのひと時がなきゃ、ロイドなんてとっくにクビにしてやってる所よね」
ポツリと呟く。
あの嫌味ったらしい執事の顔が浮かぶ。
あの飄々とした口調でエルミーラを呼ぶ声が耳に響く。
ごん
無意識に、エルミーラは右腕を振り下ろしていた。
マシンの表面が悲しそうな音を立てる。
「いえ、いえいえ・・・・今はあんなヤツ忘れなきゃ。せっかくの楽しみなんだからっ☒」
ロイドなんて、とばかりにエルミーラは頭を振るった。
改めて、開いたマシンの内部へと足を入れる。

エルミーラのオーダーメイドで作製されたこのマシンは、精密な分だけ入念な準備が肝心だ。
先ずは全身をくまなくローションで濡らす事。
そして、ぴったりと内部のくぼみに身体を埋める事。
「よっ・・・・・毎回、ここが難しいの、よっ」
身体をひねり、狭い隙間から両肩を押し入れる。
下半身が入りきり、尻が台に触れる。
コートを着込むようにして両腕を滑り込ませる。
狭い裂け目はエルミーラの関節や腕輪を引っ掛け、スムーズな着衣を阻害する。
えいや、と強引に手を引き込むと、最後は頭を嵌め込めばおしまいだ。
使用者が完全に内部に入ったことを認識すると、マシンは自動で口を閉じ始める。
ジジジ、とジッパーが引き上がり、次第にエルミーラの視界が狭くなる。
縦割れの分け目が細く狭く、光が閉ざされていく。
「ふっ・・・・・ふっ、ふっ☒」

火照る身体を抑えきれず、熱々の吐息をこぼすエルミーラ。
次第に狭まる視界は、マシン稼働のカウントダウン。
暗い世界が完成されたが最後、再び明るくなるまでの間、少女は途切れることなき快楽の海に漬かりきるのだ。
ランプに揺れる石畳が、壁に掛けられたコレクションの数々が、次第に闇に飲まれていく。

ふと、見慣れぬものが目に入る。

いや、見知ったものではあるのだが、そこにあることが見慣れないものだ。

灰色の床に落ちた、金に光る小さな粒。
溢れた香油ではなさそうだ。
あんなもの、さっきまであっただろうか？
これ（マシン）を使ってからというもの、この視界にあったことがあっただろうか？

「……あっ」

人形に開いた僅かな隙間から、エルミーラの呆けた声が聞こえた。
胸のつっかえが取れたような目の色が、みるみる白く染まっていく。

「ちょっと、ま」

そこで、ジッパーが完全に引き上がった。
エルミーラの声も、顔も、あの香油の香りさえ、外には一切漏れることはない。
今この瞬間、エルミーラは外界から完全に隔絶された。
床でキラリと光る、マシン操作用の鍵を残して。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「まずいッ！　さっき腕引っ掛けたのかな……ううん、そんなことよりっ！」

エルミーラの目の前には、いくつもの文字列が浮かんだ

パネルが開いては閉じ、マシンの起動準備を進めている。
しかし、そこに移る文字の羅列は、これまでエルミーラが見たこともないものばかりだ。
知りもしなかった仕様、説明書になかったはずのギミック、絶対に使わないと決めていたモード。
それらが使用者であるエルミーラの手を離れ、勝手に設定されていく。
「準備中」と表示されたパネルのバーが、40％を超え、50％を超え、今75％に到達する。
エルミーラは目の前に浮かぶそれらの文字を、ただただ歯噛みして見ることしかできなかった。

本来それは、エルミーラが鍵を使って制御するはずの設定だ。
だが今、エルミーラの手に鍵はない。
マシンに入るその瞬間、腕輪から外れて落ちたことに気がつかなかったのだ。
制御装置を失ったエルミーラは、このマシンにおいて最も発言力の無き存在。
マシンが決めたプロトコルに従い、されるがままに喘ぐだけの部品と化す。

加えて、状況はエルミーラにとって更に悪い状況へと変わりつつあった。

「な、なに何ナニっ⁉ そんな設定したことないんだけど……時間、無制限とか！ 露出モード……？ マゾ調教システムってなんなのよ！」

流れていく文字列の一つひとつが、エルミーラの知らない、又は知っていても恐ろしくて試してもいなかった設定ばかりだ。
単語を見るだけで気を失ってしまいそうなものから、単語だけではナニが起こるのか理解も及ばないものまで。
エルミーラはそんなワードたちに丁寧にツッコミを入れていく。

そう、エルミーラが設定から外していたはずの装置が動き出していた。
例え操作アイテムを失ったとしても、このような滅茶苦茶な設定は生まれない。
あくまで、エルミーラが選んだ設定の中からランダムでメニューが決められるだけのはずなのだ。

エルミーラはもう、この異常事態の原因に行き着いていた。

「やば、さっき殴ったから……システムバグったの？」

ロイドを思い出し、思わず振り上げたあの拳。
思わずマシンを殴打してしまったあの一瞬。
あの一撃がマシンの設定を狂わせたのだろう。

「やっちゃった……！　設定が完全にランダムに切り替わったのね。どうにかして止めなきゃ……」

無駄だ。
そんなことはエルミーラもよく分かっている。
このマシンは至高のオナニーマシン。
一度設定したならば、使用者であっても止めることはできない優れもの。
完全にマシンに収まり、こうして準備完了の時を待っている今、エルミーラは文字通り手も足も出ないのだ。
加える指を持ち上げる権利もない。
眉根に皺を寄せ、未開の文字に赤面し、瞬きすることもできずにそれらを見送る。

そうしてただ、審判の時を待つのみだ。

「準備中」のパネルが消え、「起動」の二文字が浮かび上がった。

「……っ☒な、ナニが来るってのよ……☒」

気付かぬうち、下腹部に力が篭る。
香油でコーティングされた身体が、未知の熱を放ちだす。
どくどくと暴れる心臓は、マシンに入る前までと変わらない。
身体が心臓そのものになったかのように、皮膚が荒く拍動する。
漆黒の世界で、期待と恐怖を混ぜこぜにして待つ。

「……きゃっ!?」

突如、痛覚まで悲鳴をあげるような閃光がエルミーラを襲う。
ほんの一瞬、人形が開いたのかと期待した。
誤作動に誤作動を重ねた結果、エラーにより使用者を解放しようと機能したのかと想像した。

だがそれはあるはずもない希望だ。
マシンは正常に、異常すぎるほど正常に稼働する。
その行く末は、あくまでエルミーラの絶頂だけだ。
閃光が溶けて消えた時、エルミーラはぽかんと口を開けていた。

ざわりざわりと夥しい数の人の声。
夜空が見下ろす広場に置かれた白いテーブル。
蜂蜜の香りが心地よい紅茶の湯気。
エルミーラは見知らぬ場所の、見知らぬカフェで、一人腰を下ろしていた。

「ナニこれ……ワープしたわけ、じゃないわよね？　もしかして電子映像（バーチャル・リアリティ）？」

慌ただしく周囲をみつめるエルミーラ。
彼女の想像通り、マシンの内壁に映し出されている架空現実世界だろう。
だがその余にも現実味のある精巧な作りは、椅子ごとワープしたと錯覚してもおかしくない出来だ。

労働者風の男たちが急ぎ足で通り過ぎ、町娘たちが夜遊びにふける。
裏路地からは嫌らしい服装の女性が手を伸ばし、一人で歩く男たちを誘っていた。
鼻をくすぐる香りもまた、カフェから漂う料理の香りや人々から発せられる生物の匂いが混ざりあったもの。
エルミーラのあらゆる感覚が、この場を「本物」と誤認し始めていた。

「映像は凄いけど……でもこれ、一体何モードなのかしら？　今まで設定したことがないモードなのは確かなんだけど」

エルミーラは首を傾げた。
ここまでおよそ数分間、ただただ街並みを映し出しているだけ。
景色の作り込み自体は現実と見間違うほどの精密具合だが、これを眺め続けることに何の快楽があると言うのか。

やはりエラーか。
安堵しつつ、ほんの少しだけ残念に思っていたエルミーラ。

だが、何度も繰り返すようにマシンは正常に動いていた。

『うわ、変態じゃん』

「ッいいっ☒な、なにっ!? 声、ビリって、痺れる……？」

耳に、いや身体全体に響き渡る誰かの声。

エルミーラは不意打ち気味に飛んできたその感覚に思わず甘い声をあげた。

言葉を脳で理解するように、エルミーラの皮膚がピリピリと震えて言葉を吸収する。

香油で味付けされた皮膚は、そんな刺激を待っていましたとばかりに受け止めた。

エルミーラは慌てて顔をあげ、声の主を探す。

女子学生が二人、足を止めてエルミーラを見上げていた。

間違いなく、今の言葉は彼女たちから発せられていた。

四つの目が細められ、裸のエルミーラを汚物でも見るように捉えている。

一方の少女がもう一方へと耳打ちの姿勢をとっていた。

『あれヤバくない？　全裸で外歩いているとか、ありえない』

「んッ☒なにっ☒お、おっぱいっ☒ちくびぃ☒ジンジンくる☒」

ヒソヒソと二人にしか聞こえないようにして会話する女学生たち。

だが、エルミーラの聴覚にははっきりとその内容が響いてくる。

『キモっ、こっち見てるじゃん。何あれ、見られてコーフンしてんの？』

「はっぐぅう☒しびッ、れるぅっ☒声、シビれるっ☒」

そして、少女たちの言葉に呼応し、エルミーラの身体が電気マッサージを浴びたかのように痺れ出す。

ショックを受けるレベルではない、淡く広がる快楽の電流。

まるで緊張した皮膚を優しく解きほぐすように、身体の隅々へと広がっていく。

少女たちが言葉を交わすほど、エルミーラの肌がチリチリと喘ぐ。

敏感な乳首にも、期待で濡れたワレメにも、愛撫の刺激

が撫でていく。

『ちッ、変態。こっち見ないでよね』

『うわ、なんか肌がヌメッとしてない？　見られてテンションあがてんのかな』

「ん〝ぅうッ⊠く、ふぅうう⊠や、めてっ⊠わたしは変態なんかじゃ、ないっ⊠」

耳を塞ごうにも、両腕はぴったりとしたマシンの内部に固定されている。

例え塞いだとしても、エルミーラの肌が少女たちの言葉をしっかりと「聞き届けて」しまうだろう。

二人は口々にエルミーラへとトゲのある言葉を吐きつける。

それはエルミーラの羞恥を掻き立てると同時に、文字通りの刺々しさを肌に焼き付けた。

『ふふ、なんか顔赤くして悶えてるー。本気の変態じゃんね』

『変態だから何されても喜んじゃうんだ。あんな道端でアンアン言ってて、恥ずかしくないんだね』

『違うって、恥ずかしいのがイイから変態なんでしょ』

「ふっ、ちがッ⊠くぁあんッ⊠ば、バーチャルの分際でっえ⊠わ、わたしをバカにしてへぇッ⊠⊠⊠」

パチン、パチンと弾ける快感。

予測出来ない角度から、エルミーラの身体を弄り尽くす。

ローションを伸ばすように身体を撫で回す刺激が来たかと思えば、クリトリスを抓られたかと錯覚する鋭い刺激に襲われる。

乳首を弾くような刺激で少女が鳴くと、刺激は何処にも居なくなる。

呼吸を整え、少女の罵倒に慣れたと思った瞬間に、また手足をさするように電流が走る。

『変態女が何か言ってるよ』

『あんなトロ顔している癖に、まだ変態じゃないつもりなのかな』

「ふっ⊠ふくっ⊠ひふ⊠ふゆぅ⊠いい加減ッ⊠⊠⊠ッくひぃいいッ⊠」

喘ぎ喘ぎ、少女へと怒気を向けるエルミーラ。

放ちかけた言葉がひっくり返り、背筋を剃らせて声を飛

ばした。
背中に弾ける新たな刺激がエルミーラを戸惑わせた。
初めての刺激に合わせるように、初めての声が響いてくる。

『うおっ！　露出狂じゃないか。それも若い女の子だ！』
『へ、へへ、露出狂なら写真撮っても大丈夫だよねえ……？
今晩のお宝は決まりだなあ』
「ひ……いんっ☒な、やめッ☒ま、また新しいッ☒ひっ☒きふぅうッ☒」

先の女子学生とは別の団体。
数名の中年男性たちが、エルミーラに好奇の瞳を向けていた。
つくつくと深く差し込まれるような女子学生の視線から一転、ねっとりと油を塗りたくるような重くどろりとした視線がエルミーラを包む。

声の主が変わると、身体に響く刺激の質も変化する。
皮膚を押し、指を沈ませるようなモーションををイメージさせる、卑猥な刺激だ。
男性の声で発せられるものだから、エルミーラの脳内には自分の身体に手を伸ばす、下品な中年男性たちが浮かんでしまう。

「はう〝ぅ☒っくぁ☒ったく嫌らしい手付きでっ☒さ、触ってんじゃないぃッ☒」

ぬろ、と乳首を舐られる感覚。
すっかり凝り固まったエルミーラの乳首は、刺激に堪らずぶるぶると震えた。

『見られて罵倒されて、すっかり喜んでいるねえ』
『あんなに嬉しそうにされると、僕たちも写真を撮る手に力が篭るってものだよ』
「……っ☒」

次々に焚かれるカメラのフラッシュ。
エルミーラは屈辱に眉を潜めて目を閉じる。
顔を背けることすらも許されないこのマシンの中では、視界を塞ぐ以外にはこの映像から逃れる術は無いのだ。

それももう、罵倒に快感を叫ぶ肉体が許してはくれなかったのだが。

「はぐッ☒も、もう、やめてッ☒☒☒はぁ☒はぁッんぅう☒もう、しゃべんないでよォっ☒お、おかしくなるっ☒カラダへんになっちゃうぅうッ☒☒☒」

『おやおや。耳まで真っ赤になってしまって、可哀想だねえ』

『見てよ、これだけ人が集まっても身体を隠さないよ。きっととんでもない変態さんなのでしょうね』

『こんな状況で裸になるとか、恥ずかしくって私なら即刻死んじゃうんだろうなあ～。変態ってすごいわ～』

『おい、マジかよ。これもしかして、見られるだけでイっちまいそうになっているよなあ。へへ、ハイレベルな露出プレイに大満足ってかぁ』

「ん〝ぅう〝ッ☒☒☒う、ぅぅうぅぅう〝ーッ☒」

次第に増える人の声。

慣れる間も無く、新たな電流が皮膚を震わす。

エルミーラは言葉に悶え、言葉に喘いだ。

少女の肉体は、まるで言葉たちに誘導されるように、淫らな昂りを募らせる。

手足が燃えるように熱い。

心臓がドラマーにでも叩かれているみたいだ。

皮膚の下で、快感の文字が爆発しそうに揺れていた。

「だッ、こんなので……ッ☒っくぅうぅぅうぅぅぅ☒☒☒」

全身が硬直する。

天地がひっくり返り、エルミーラの心は宙に投げ出された。

乳首が弾け、子宮が引き絞られる。

頭の中が真っ白な花火で埋め尽くされて、エルミーラは獣のように嬌声をあげた。

（イ……かされたッ……声、だけでぇ……っ☒）

悔しさも恥ずかしさも、飛び出した意識ごと霧散していく。

緊張と不安に快楽が重なって、エルミーラの精神は意識を手放したのだ。

ゆっくりと、眠るように気を失う少女。

バーチャルの世界が暗くなっていく。

ドクドクと早打ちされる血脈の感覚が、揺り籠のように心地よい。

始まったばかりの快楽の宴。

エルミーラは残り少ない平穏を堪能する。

long sample

発行日　2020 年 1 月 31 日

著者　山茶花　久
https://www.pixiv.net/member.php?id=2467259

Generated by pixiv
本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。